

あゆみ通信

VOL. 102

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

仏法は聴聞にきわまる

6/22第2回例会 にご参集を

春に芽吹いた草花が、いろいろの恵みを得て、いよいよぐんぐんと育つ季節になりました。人はどうでしょうか。

真宗教徒とは

真宗教徒とは専修念仏の教えに生きる人の謂(い)いです。

「念仏ひとつ」ということは念仏が生活原理になるということです。生活の中で念仏するのではなく、念仏の上に生活が営まれることを意味します。その生活とは、私たちにとっては現代の日本における生きようですから、それは当然、政治・経済・教育というようなというような社会的諸機能との具体的で積極的な関わりとなってはたらかずにはおれません。それは真宗教徒の政治観、経済観、教育観の確立とそれによって営まれる成果有実践ということになります。(続く)

あゆみの会第2回例会

日時 2017年6月22日(木)

午後1時30分

会場 了安寺(天王寺区生玉町)

講師 竹中慈祥先生(前駐在)

(別途、ご案内)

なお、終了後臨時総会を持ち、新・大推協結成の経過を会長等から報告します。

大阪教区同朋大会で、細川克彦氏が意見発表



2017年5月20日(土) 午前10時から、難波別院本堂において、第43回大阪教区同朋大会が「現代の危機を親鸞聖人に



問う～満たされて生きるには?～」をテーマに1000人を超える参加で開催された。司会は第2組の岸野龍之氏(稱念寺)。勤行のあと、宮浦一郎大阪教務所長の挨拶、そして門徒の声に。細川克彦氏



(佛足寺・あゆみの会副会長)さんは、父の死を縁として、自身の「生きる意味とは何か」についての問いを契機に聞法の歩みについて話された。また、山瀬一美さん(8組、受西寺)も母の死から、つながったお寺との御縁で始められた



聞法の中で出会われた内山宗之さん(3組西元寺・大阪教区門徒会長)の、「歎異抄」の法座で、

身をもって感じられた感話について、自らの生活を重ね合わせて、問い直されたことを述べられた。休憩をはさみ講演された川村



妙慶さん(京都教区 正念寺・アナウンサー)は、親鸞聖人に和讃から「生死の苦海ほとりなし/ひさしくしづめるわれらをば/弥陀弘誓のふねのみぞ/のせてかならずわたしける」を紹介されながら、他力の中に救われる自分がある。御同朋御同行と話された。行事部から閉会の挨拶があり、終了した。

(次頁に細川氏の感話掲載)

道は近きにあり

明治の先達清澤満之師の言葉である。言葉はこう続く。

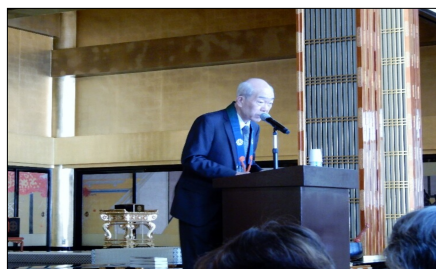
「道は近きにあり 迷える人はこれを遠きに求む」

思えば、2004年に母を亡くした自分が友人と「自分探し」に出かけた四国88か所めぐりは、まさにそのことであった。2年かけて結願?した自分が教わったのは童話「青い鳥」の、自分の中に仏法を見つけたことにあった。清澤満之師はすでに見抜かれていた。この言葉に触れて、ああ、自分は仏法に育てられていたのだと気づいたことである。

「仏法、ひろまれ」

聞法の大事さに、あらためて気付かされたこと。(本)

細川克彦氏感話要約



私がまだ仏教に出会う前の20歳の頃、いつからともなく何か心にぽっかりと穴が開いている気がし「人間は何のために生きているのだろう」「生きる意味は何だろう」という問いがふっと起こってきました。そしてその問いは私の心の中でずっと続いていました。しかし答えは容易に見つけれず、またそのことに悩みつづ、そして何年もたつと半ば諦めて過ごしておりました。仏教については死んでからのことを問題にしていると思い込んでいたので関心も殆ど湧いてきませんでした。26歳の時、父の死をきっかけにお手次のお寺佛足寺とご縁が出来毎月御参りに来ていただきましたが、いろいろ疑問が湧いてきて、例えば「どんな気持ちでお念仏をすればよいのか」お聞きしたこともあります。そんな私が35歳の時に先代のご住職から、第2組で本山特別伝道(今の推進員養成講座)があるので参加しませんかとお誘いがあり、私は以前から抱えていた「生きる意味」の答えがを見つけ出せるかもという期待と仏教や真宗の教えを聞いてみたいと思い参加しました。そこで講師の先生から「仏教は今の人生そのものを問題にしている」というお言葉をいただいたように思いま

す。その言葉が心に残り、仏教のお話を聞いて行こうという気持ちになったと覚えています。

前期教習を重ねていくうちに、さらに聞法出来る場所に行きたくなり、お尋ねしたところ、お世話をいただいている方から、南御堂でいろいろ法話の集いが開かれていると紹介されて、仏教の講座に出席するようになり、今日まで続いています。



お手次の佛足寺様の永代経法要や報恩講にも聞法させていただき、第2組でも住職や坊主、寺族と門徒が共に聞法できる聞法会が年5回位開かれており、参加しています。また、9年ほど前から第2組二期推進員養成講座修了された方々による第2組組推協「あゆみの会」が出来、年4回の勉強会にも参加させていただいています。いまでは皆様と心安くなり何でも話せるようになりました。

また、どの法座でも、参加されている皆さんとお顔を合わせると「聞法しなさいよ」と励まされているように感じ御同朋御同行って有難いなあと実感しております。

しかし、そのようにして聞法場に参加して30年ほどが経ちましたが初めの「生きる意味」という問いに答を見いだせず、また、仏教や真宗の教えを知識として理解しようとしていたのが、真底から喜びが湧いて来たり、或いは何かはっきりした自覚には至らなかったように思います。そんな状態でも、何か後ろから

押されるような気持ちで聞法に出かけておりました。

数年前の法座で、私は我が身がいのちの長い歴史を経てきていること。また、無数のいのちをいただいて、自分のいのちをつないで来たこと。つまり、我が身ということ、我が身の背景に気付きなさいと教えられた時、これまでこのようなことに気付いてこなかったことに驚きを感じました。私は前ばかりを見ていて、背景をみるということが無かつ



た気がします。

また、昨年、人間の底には理智分別では捉えられない何か深いものがある。仏様はそのことを教えようとされているのではないかと考えるようになり、降参した気がしました。

私はい「生きる意味は何か」という問いを持ちつつ、その深いものに触れて行けたらと今は考えております。これからも理智分別は起こってくると思っていますが、いつもそこへ帰っていくことを大切にしたいと思っています。

すべてよき師、よき友のお導きのお陰であると思えてなりません。

私もまた、同朋の輪を広げることに努めてまいりたいと思います。終わり。

(要約は事務局です)